

5月のコラム 同じ家に育っても

連休に家の片づけをしていたら、私が八歳のとき、学校で母の日に書いた作文が出てきました。

「おこづかいをみんなつかってしまった。だからプレゼントをかうかわりに、わたしのものをあげる。」思わず笑ってしまいました。当時は、一日十円か二十円ほどのおこづかいだったと思いますが、それは毎日の駄菓子で消えていたのでしょう。計画性のなさというか、貯めることが苦手な性分の片りんが、幼いころからしっかり現れていたことに、妙に感心してしまいました。

けれども、続けて「いままでにわたしは、おかあさんの日にプレゼントをしたことがありません。これからはいつもします。」とあり、翌年の作文には、祖母と妹と一緒に母への贈り物を選んだことが書かれていました。それなりに成長した幼い自分が少し誇らしい。

二つ下の妹は、お年玉をきちんと貯める子でした。同じ親のもとで育ち、同じものを食べ、同じような毎日を過ごしてきたのに、性格も考え方もまるで違う。同じ環境で育っても、人はなぜこうも違うのだろうとよく思います。

人はそれぞれ、感じ方も、大切にすることも、受け止め方も異なります。近い存在である兄弟姉妹でさえそうなのですから、異なる文化や習慣の中で育ってきた人同士が、互いをすぐに理解し合えないのは、ある意味で当然のことなのでしょう。

近年、多くの職場で外国人材と共に働くことが当たり前になってきました。働き方や価値観の違いに戸惑う声を耳にすることも少なくありません。けれど、その難しさは「外国人だから」ということだけではなく、本来、人と人が関わる以上、誰に対してもあるものではないかと思います。日本人同士でも、伝わらないこと、わかり合えないことは日々たくさんあります。

大切なのは、「わからない」と線を引くことではなく、「自分とは違うひとりの人」として受け止めること。理解しようとする姿勢を持ち、ことばを尽くし、根気よく向き合うこと。遠回りのようでいて、それが結局はいちばん確かな道なのだと思います。

子どもの考えることは、どこかおかしくて、けれど本人はいたって真剣です。その真剣さは、大人になっても案外変わらないのかもしれませんが。

人はみな、それぞれ違う思いや考えを抱えながら、一生懸命に生きている。そう思うと、相手を見る目も、少しだけ優しくなれる気がします。

2026年5月 水田かほる